

鹿児島県国語教育史研究 I

—「我等の學園」を中心に—

The History of Japanese Language Education

in Kagoshima Prefecture Schools I

— A Study of "Warera no Gakuen" —

新名主 健 一

Kenichi SHINMIYŌZU

(一九八六年十月十五日 受理)

「我等の學園」の創刊号は明治三十八年十月に麿島高等小學校々友會から発行されている。終刊は定かではないが、後に論じるように一四七号の出された昭和十六年三月以降、二・三号までと考えられる。体裁は菊判活版刷である。

私がある存在を確認できた号をあげると次の通りである。

- 1、六號 明治四十年四月 麿島高等小學校々友會。2、第十七號 明治四十四年四月 同校々友會。3、三十週年記念 大正十一年十二月 鹿児島尋常高等小學校々友會。4、學校より家庭へ 昭和三年六月 同校々友會。5、一・二・三 昭和七年七月 鹿児島尋常高等小學校々友會。6、創立四十周年號 一・二・三 昭和七年十二月 同上校々友會。7、第百二十八號 昭和九年三月 同上校々友會。8、一・二・三 昭和九年七月 鹿児島尋常小學校々友會。9、一・二・三 昭和十年七月 同上校々友會。10、特別大演習記念號 一・二・三 昭和十年十二月。11、落成・除幕・卒業 記念號 一・二・三 同上校々友會。12、生活指導號 一・二・三 昭和十三年七月 鹿児島尋常高等小學校々友會。13、卒業記念號 一・二・三 昭和十三年七月 鹿児島尋常高等小學校々友會。

- 和十四年三月 同上校々友會。14、一・二・三 昭和十四年七月 同上校々友會。15、一・二・三 昭和十四年十二月 同上校々友會。16、卒業記念號 一・二・三 昭和十五年三月 同上校々友會。17、紀元二千六百年記念號 一・二・三 昭和十六年三月 同上校々友會。

1・2は名山小学校蔵、3・17は副田凱馬(よしま)氏蔵である。刊行の号数については、3の「創立三十週年記念 大正十一年 十二月号」の五枚目(ページ数なし)に次のような記述がある。

「明治三十八年校友會が組織されて、雜誌我等の學園第一號が発刊された。それから毎月發行することもあり、學期毎に發行することもあり、ある時には臨時號を出したこともあって百二號を重ねたのである。」現存本をみても學期一回年三回の發行は原則であったことがうかがえるが、毎月発行されたり、あるいは臨時號として出ているがために、未発見本の通算の号数を単純に年月に対応して特定することは困難である。

この「我等の學園」の持つ価値は次の三点であろう。管見によればひとつには比較すべき対象が見当たらない、言い換えると日本でも古い方にはいる学校詩文集ではないだろうかということ。もうひとつには、綴方教育史の展開がその誌上にうかがえるということ。三つめには、綴方

育上の新提案を試みていること。そしてこの提案は現代でも有効な提案であること。

しかしながら、他と比較検討することができない段階なので、各号をなるべく詳細に検討していき、その特色を明らかにしたい。なお、検討する順序は、先の冒頭の算用数字通りにする。

二

1、六號 明治四十年四月 八十二頁。作品点数・綴方八十三点。「文壇」として、「一、懸賞文 二、日用文 三、記事文」の三つに分けて掲載している。また、「よその花」として鹿兒島県内の他の高等小學校、盈進校、國分枝、本城校、知覧校、指宿校、隈之城校の綴方二点づつを掲載している。詩・短歌・俳句も八ページにわたり掲載している。他のページは、はしがき・訓話・歴史譚である。

この号における綴方は形式主義・文型主義で美辭麗句の羅列に特徴が見られる。この号発行よりやや前の明治三十六・七年頃の綴方について内田新一は次のように記述している。(『綴方に於ける「表現と鑑賞」の心理』。「鹿兒島教育」昭和五年四月号P28所収)

「私達の小學三、四年頃明治三十六、七年頃の状態を考へて見ると其の頃は「作文」と言つて居たが、其の文題の如きは例へば、「觀梅に友を誘ふの文」とか、「稻刈に加勢を頼む文」とか言ふ様なもので、殆ど實用一方の題目で、時間の始めに教師が案文を朗讀する生徒はそれを一言一句記憶してなるべく教師の文に似たものを書く、それが又よい文とされて居た。即ち『創作』よりも『模倣』、『内容』よりも『形式』が主になつて居た状態で、作文と言ふ言葉の示す様に文を作つて居た状態であつた。即ち當時は作文とは「與へなれた文題に依つて、他人の文型を模倣

し、他人の美辭麗句を借用し、文字を点綴すること」であると考へられていた。」この記述がそのままではまる作品が大多数である。

次にこの號には夏目漱石の「吾輩は猫である」(明治三十八年)のよな手法をとる作文がでてくる。『キセル』の身の上話』『草履と靴との物語』おそろく作文教師の讀む作品に影響されたのであろう。

掲載されている作品からうかがわれるこの頃の作文教育においては、課題主義・点数化・短文練習(33・44P)があげられる。

ところでこの頃の生徒にとつて「我等の學園」はどのような存在であつたかをうかがわせる次の作品がある。(50P)

僕の好友

第四學年 馬谷場辰己

僕の好友は何だろ!?

此ぞ我學校發行の我等の學園である。僕は此雜誌を寸時と机邊からはなさず、暇さへあれば、此を讀んで好いところは、之を應用し、惡ひ所はよく直して綴方をけいこし、又は俳句を練習し、英語や算術を研究しつゝあるのである。それ故此雜誌が發達進歩して、益々隆盛にならん事を希望するのである。

発刊から二年経て、このような読まれ方をすることは編集者の本意にかなない、また、このような利用のしかたこそ至上であるとする啓蒙性のゆえに掲載された作品であらう。

また、この号には、「はめ絵」の課題が設けてある。総頁に対する綴方作品の割合は六割七分ぐらいである。

2、第十七號 卒業記念號 明治四十四年四月 八十三頁 この号は四部構成になつており、「はまれ」では卒業に関する文章(告示・送辞等)、

「たんぽぽ」では教師五名による五点の読物、「ひばり」では在学生の綴方が二十一点、「おもひで」では卒業生の作品が「寫生小品」として三十六点掲載されている。さらに附録として「算術問題に就て」、「校友の手紙」「遠行記」「學校日誌」が掲載されている。

この号では総頁に対する綴方作品の割合は七割を越えている。

ところで副田凱馬氏（市尋高在職大正十五年四月～昭和十七年九月）は「檜舞臺へ」（驥歩——磯長武雄君の追憶——）所収・鹿兒島縣綴方教育研究会 昭和十三年十二月）において次のように記している。

さて磯長さんの編輯以前の『學園』は父兄に向つての學校教育報告の使命を遵守し、兒童文は稍ともすれば副次的な存在として編輯される向きがあったのだが、磯長さんは、これを全然兒童文集として編輯し、綴方教育建設の道場として、文話・詩話・評話・合評記事等の掲載に努められたのであった。（同書73P）

しかしながら、明治期の「我等の學園」はこの指摘から除外しなければなるまい。というのも形式主義的綴方ではあるが、先の六・十七號の検討で触れたように綴方作品は、他の何にも増して内容的に大きな割合を占めているからである。それではこの副田氏の指摘する『學園』の発刊年月の範囲はどのように考えたらいいであろうか。

磯長武雄（市尋高在職昭和三年三月三十一日～昭和七年三月三十一日）は昭和三年三月三十一日に市尋高代用教員を拝命している。従つて少なくとも明治四十四年四月の第十七号以降昭和三年三月までに発行された『學園』が、ある時を境にして文集的性格から教育報告集的性格に変わっていることが考えられる。

3、創立三十週年記念 大正十一年十二月 八十八頁
創立三十周年にあたり校長・職員はそれぞれの感慨・決意を記している。校長兼子鎮雄は「創立三十週年記念號に」と題して次のように記している。

今年になって我が校は名山小學・女子尋高校と併合し、こゝに五十八學級、兒童數は參千參百、先生方が六十五人といふ大きな學校となつたのです。形の大きいことは恐らく全國にその比を見ないことでせう。しかし單に形の大きいといふことは私達の誇りとはなりません。形は「質」の滲みこんだものでなければなりません。先生も生徒もみんなが、よい人にならねばなりません。私達が心を覺まして勉強する時に初めて形が生きてくるのです。むかしから偉人を生んだ薩南城下の地です。私達はお互の努力で日本一の形を日本一の質にまでなさねばなりません。（同号三～四枚目・頁ナシ）

兼子校長は大正八年八月に赴任し、昭和九年三月に別府中学校長として転出するまで十六年間に在職している。赴任当時の兒童は「物騒で學習心の喚起なく、もとより學習態度などは根底からぶちこはされたような姿態であつた。」（武泉 良「四十周年記念誌」61P）ために、これ以降『校長先生はいつも「日本一の形の大きい學校を日本の質のよい學校に」とお話しになる。』（高一 一の組瀬田信行「四十周年記念誌」42P）になるのである。

さて、この号は兒童の作品——三十周年とは無縁——が百二十一点掲載されているが、編集や掲載作品には特色は見うけられない。

4、學校より家庭へ 昭和三年六月 四十二頁

発行号数が抜けていて号数は特定できないが、この号において磯長武雄が詩話「児童自由詩の鑑賞」と題して八頁、天風（副田氏によると稲森植資）による「文を生む心」が四頁にわたって記してある。詩、綴方の掲載点数は十八点である。作者名は記していないが、各作品ごとに評がつけてある。この号は先の副田氏の指摘・学校教育報告集的な色彩がまだ残っている。

前出「檜舞臺へ」（副田凱馬「驥歩」所収）に次のような記述がある。磯長さんが編輯主任として編輯したのは其の百十五号から（昭和四年七月号）百二十一号（昭和七年十二月号）までであった。其の中磯長さんが磯長さんの面目を發揮し始めた百十八号からであった。就中科學的綴方號として編輯した百二十号は菊池知勇氏をして日本一の文集として讚嘆せしめた。（同書71P）

磯長は昭和三年三月に市尋高の代用教員を拝命し、昭和七年四月には神山校の訓導になっている。（驥歩）年譜）したがって前記の（昭和七年十二月号）は昭和六年の誤植であろう。このことについては副田氏も首肯されたところである。

「綴方教育」では昭和五年、六年と八月特輯号——全国小學校児童文集展覽會——を出している。昭和五年の同号には次のような記述がある。「我等の學園」（鹿兒島校）散文及詩一篇毎に長文の懇切妥當な指導評語があり、文話・詩話・鑑賞欄等なかなかよく整備されてゐます。磯長武雄氏の努力です。（同号117P）昭和六年のものも同様の記述が見られる。（176P）

残念なことに磯長の編集した百十五号から百二十一号は現存していない。これらの号からは磯長の詩・綴方観がとらえられるに違いないのだ

が……。

5、1-23 昭和七年七月 一六二頁
創作集（散文92點）・創作集「公開教授」（散文）十五點・詩話・創作集（詩九十一點）・二期の行事綴方生活が掲載されている。

この年は創立四十周年にあたる。兼子校長の「日本一の形を日本一の質にまで」の標語は現実のものになり、すでに昭和四年には「世界ノ新教育會議ニ紹介セラレタル日本ノ新教育學校及ビ其ノ教育方針」（鹿兒島教育）昭和四年十月号 鹿兒島縣教育會）において全国五六校の中の一校として紹介註されている。

6、創立四十周年号 1-24 昭和七年十二月 二四八頁

創立四十周年を迎えての見出しで児童が四十七点の綴方。創作集（散文）で九十四点、同じく詩で九十点の作品が掲載されている。創作集（散文）においては各作品の後にかなり長い評が添えられている。その上、各学年（一・二年の総評、三・四年の総評というように）毎に詳しく総評がなされている。さらには参考作品として散文・詩を全国各地から募った中から優秀なものを選んで掲載している。「文を生む生活について」と題して外園郁也が記し、副田氏は学校劇「四十周年給巻物」を掲載している。

この号において校長兼子は次のように記し、三十周年の時の標語が現実のものになったことを認めている。

噫！憶へば創立三十年の記念日に於てかゝげた「日本一の形を日本一の質にまで」といへる標語は、聖勅の精神に基き郷土及學校の實情に立脚し、時代の動きを洞察せる全校児童職員必死の努力に依って既に日本一の鹿兒島校とはなり得た。（同号13P）

また同号十三Pにおいて旧職員総代の松下重資は祝辞の中で概略次のように記している。

校長兼子氏は自學々習の學風を樹立し、個性適応の教育を進め、教士教育に邁進した第一人者である。職員も「學識あくまで浮く人格高き兼子校長の下に一騎當千の武者ぶるい、一校共働全我精神の旗印を掲げて學習法の樹立に日に日をついで働きつくしたものである。稲森禎資」(五十八P)のようなことを記している。

この号の三枚目には名山小學卒業生與謝野寛氏の和歌が掲げられている。編集後記によると「扉裏の歌は日本歌壇の先覺者としてあまりにも有名な與謝野寛先生が母校の盛典に寄せられたもの」とある。

なつかしき名山小學わが道を

知りえしことも此處に本づく

寛

7、第百二十八号 昭和九年三月 一六四頁

この号は本来は卒業記念号であるが、兼子校長が別府中校長として招かれ市尋高を辞することから、送別の号となっている。また首席訓導の逝去をいたむ項もある。「我等の慈父 兼子校長先生に送る」では十四点の綴方が掲載されている。子どもの綴方にあらわれた兼子校長の人となりあらわすものをひろいあげていく。

にこにこわらって(33P)・やさしくいわれた(同P)・おれいをしたらにこにこしておれいをして下さいました(33P)・妙圓寺詣のとき、行く途中でどこかの學校の先生が校長先生に「お茶をおあがりにならねませんか」とおっしゃったが、僕等のことを心配されて「生徒が居りますから」といってお飲みになりませんでした。(35P) 雨の降る中を僕

達と一緒にぬれぬずみのようになられた。(同P)・やさしく注意して

(同P)・にこにここと教室に來られた(36P)・熱聲は校庭のすみまでひびいて居った(同P)・道であひおじぎすればにこにこかかると帽子をとられた先生(同P)・鹿兒島縣には勿論全國にまで、市尋高と云へば兼子校長を、兼子校長と云へば市尋高と思はせる程(39P)・朗々たる御聲(42P)合理的にせよ(44P) 倦む事なき御研究心(45P)

なにしろ兒童數三千名を越す學校にあって子ども達からこの様にとらえられている校長こそは、まさしくすばらしき教育者そのものである。

さて、この号には創作集(散文)郷土の姿として三十六点の綴方、創作集(其の三)として散文・詩が掲載されている。この号で特筆すべきことは尋一にはじめて番号作文がでてくることである。これは副田凱馬氏の創案によるもので、一、二、三、ノツヅリカタ・番号づけ作文とかわれたりする。この番号作文については別稿で検討したい。

四

8、126 昭和九年七月 一〇八頁

この号は作文・おたより・詩・嗚呼 東郷元帥の四部で構成されている。作文は六十八点である。このうち五点はたいわである。たいわは会話文のことで、会話文だけで構成された作文である。尋二の子どもの作品に対する評を読むと「こゝまでゆくと、りっぱなげきだ。この次のがくげいくわいには、みなさんのつくったげきをみなさんの力でやれるやうになるでせう。」とか「げきもすぐかけますよ。」というのがある。これは会話文の「」の使い方に慣れさせるとともに子どもたちによる劇作品を意図したものであろう。全国的には大正十二年ごろから學校劇が盛んになりはじめ、この市尋高においても副田氏が劇に取り組んでいた。

124号において、「學校劇 四十周年繪巻物」をあらわしているのも副田氏である。

おたよりはかつて市尋校に在職していて、別の学校に転動していった五名の先生方からのものを掲載している。別府中に赴任した兼子校長のものを除いては、確かに市尋校の子ども達宛ではあるが、子ども達にとっては理解するのが困難な漢字・言いまわしが多い。

詩は六十九点掲載されている。

嗚呼 東郷元帥の項では元帥の逝去をいたむ作文・詩・短歌が掲載されている。

編輯後記は副田氏が記している。尋一から尋六までの綴り方の係の先生を紹介したあと、「本校の『學園』は主に此等の係の先生がお世話して下さって出来るのであります。」と記している。副田氏の公平な一面がのぞかれる。

9、132 昭和十年七月 一五一頁

この号は作文集第一部・第二部と詩によって構成されている。作文集第一部は一般作文で三十七点が掲載されている。第二部において、尋一は番号作文、尋二は「すきなべんきやう」、尋三は「讀方の學習」、尋四は「學習の綴方」、尋五は「學習法の綴方」、尋六は「調べた綴方」の見出しのもとに作品を掲載している。

昭和九年十二月(推定一三〇号)には「我等の學園・學習の綴方特集号」がでている。この号について副田氏は「鹿兒島国語教育 第四号」(鹿兒島県国語教育研究会・昭和三十一年六月)の十七頁以下に次のように記している。すなわち、①この号は意外に反響をよんだ。②「學習の綴方」は「我等の學園」で「科學的綴方特集号」や「調べた綴方特集号」を積み重ねていって最後に到達し打建てたものである。③「學習の

綴方」の寄りどころは「學習指導」(鹿兒島尋常小學校)の「學習態度の確立」の章である。④各教科學習において学んだ學習精神と學習態度を総合的に活用して生活問題・社会態度を解決して行く態度の確立が、「學習の綴方」が究極に於いてねらっている生活態度なのである。⑤「學習の綴方」は児童・生徒の生き方を、生活態度を記録して吟味し、學習することによって、更に一段とその生活態度を高めていこうと云う人間形成のための綴り方教育の主張である。

「學習の綴方」は「番号作文」とともに稿を新たに論ずるので、これ以上は言及しないことにする。

さて、それでは第二部で學習の綴方を組んだ意図は何だったのであろうか。副田氏によると、學習の綴方特集号はすべての作品が學習の綴方であったのだが、132号を編集する時、このまま學習の綴方をおわらせてはいけないということで、學習の綴方の部を設けたということである。

10、特別大演習記念誌 133 昭和十年十二月 一五〇頁

この年の十一月初旬、鹿兒島・宮崎の両県下で天皇陛下を迎えて陸軍特別大演習があった。その行幸を記念した号である。特別大演習關係記事・光榮の天覽作品の部があり、綴方は綴方作品第一部が十一・第二部が行幸記念作品で三十八点掲載されている。詩は一〇四点掲載。綴方作品第一部と第二部との間に名文鑑賞として「奉迎の二字に沸き立つ鹿兒島」という題の記事をもとに文章の觀方を廣瀬涼が記している。巻末に永野武義が冬休みの綴方生活(「冬休み中にはかうして綴方の勉強いたしませう」)について二頁記している。

11、落成・除幕・卒業・記念號 134 昭和十一年三月 一四九頁

この号は校舎改築落成式・並に前校長兼子鎮雄先生銅像除幕式、および卒業式記念号として出されている。

兼子校長は昭和九年三月まで市尋校の校長を十六年間勤め、赴任当時(大正八年八月)荒れはてていた同校を、大正十三年には学校參觀者が全国各地から五千人にも及んだというすばらしい学校に変えた名校長である。名山小百周年記念誌(昭和五十三年)に兼子校長の教育観をうかがわせる記事がある。

子ども達に「伸びよ力に」と呼びかけ——「伸びよ力に。伸びる力、それは、すべての人が持っている。進んで求めよ。真剣に努めよ。新しく工夫せよ。計画的に仕事せよ。」「人間はみんなそれぞれ自分の花を持っているのだ。春の若芽の伸びるが如く、十人十色、千紫万紅の花に咲き香れよ。」そのためには自主的に自ら学ぶ学習法(自主学習・独自学習)を「われ」「ひと」と共に伸びる「共同学習」「討議学習」を日々の学習の中で勉強し会得しようとする教員一体となった新教育の実践——(略…引用者)——つねに日に新たに日に進む「日新日進」の教育を唱えておられました。(同書35P)

一方兼子校長は銅像建立に対する謝辞の中で自らの人生観・教育観を次のようにあらわしている。

「現實ノ職務ニ人生最高ノ意義ヲ求メ教育的良心ノ導キニ強ク正シク生キタイ朝希望ニ起キ祈ヲ捧ゲ終日全力ノ活動ニ至誠ヲ效シ勝ツモ感謝敗ルルモ感謝シツツ眠ニツキタイ如何ナル時ニモ希望ノ光ヲ失ハズ如何ナルモノニモ美點ヲ發見シテ日々愛スル人々ノ爲ニ禱リツツ生活シタイ」(同書20P)

また銅像の碑文に次のような箇所がある。

其ノ經營ハ全國ニ令名ヲ馳ス殊ニ學習法ノ新研究ト郷土教育ノ建設トハ初等教育界ニ貢獻スル所甚大ナリ(同書 三枚目 頁ナシ)

兼子校長が教育者として、校長としていかに^注すばらしい実績をあげてきたかは疑う余地のないところである。

さて纏々兼子校長の業績・人となりを書いてきたのには実は次のようなわけがあるのである。さきに検討した100号の番号作文・学習の綴方は、まさに兼子校長の学校経営を背景に出てきたものと考えられるからである。副田凱馬氏は『学習の綴方』を語る(鹿兒島国語教育)第四号 昭和三十一年六月)で次のように記している。

「学習の綴方」を主張するに当り、私たちがその寄りどころとしたものを掲げるとそれは、私たちのよき指導者であり、鹿兒島県教育の父でもあった我等の鹿兒島小学校校長故兼子鎮雄先生の「学習指導」の「学習態度の確立」の章であった。(同書十九P~二〇P)

「学習指導」(大正十二年十月)は「全校職員の学習指導の資料とし更に之を修補して将来實施の手引とせんとするもの」(同書1P)として出されたもので、そのまえがきで兼子は次のように記している。

「学習」の研究は吾々の不斷の努力である。内より湧く力で創作的な学習にまで児童を生かすてう主張と要求は久しきに亘る教育界の熱望であるが理想の鍵はむしろ今に初めぬ古今を貫く一脉の流れの中に高低出没するものと吾々は思ふ。(同書1P)

兼子校長が鹿兒島を去っても、ほうほうとしてその教育観は番号作文・学習の綴方として結実したのである。

さてこの号は落成・除幕の記事が多く、ツヅリカタは四十四点、詩が六十九点掲載されている。また男子の全卒業生が「僕等の希望」と題して一行ずつ、女子の全卒業生が「思ひ出一つ」と題して一行ずつ記している。

五

12、生活指導号 一八一 昭和十三年七月 一〇〇頁

生活指導篇は「長期戦下の夏休の生活」「時局と我等の生活」「我が校の健児團について」と題する文章が掲載されている。作品第一部・綴方は尋一〜高二まで十五点、第二部・詩は八十六点掲載されている。

尋一は番号作文である。番号作文は、一七八号において初出している。その発想と内容はK・J法やブレインストーミング法と同じである。このことの検討は別稿に譲るが、副田氏は「ばんごうさくぶん」(南日本教育図書出版 昭和四十七年)に次のように記している。

わたくしが始めて番号作文を考えたのは、昭和八年のことです。どうして、わたしが、それを考えたかと云いますと、当時、わたくしが接した子どもたちの多くが、作文の時間になると、「書くことがない」とか「何を書いてよいか、わからない」とか、「書きかたがわからない」とか云って、作文に当惑し、しかたなく、いやいやながらしぶしぶと、ただ責任のがれに、十行前後の浅い文を書いて出すという状態であったからであります。(同書49P)

この号における番号作文は「キンギョ」という題で次のように書かれている。

- 1、キンギョハ、オイケノミツガキタナイトスグシニマス。
- 2、キンギョハアメガフルトキニハヨロコンデイマス。
- 3、キンギョハテニギルトバッタバタシマス。

以下同じように16まで続くのである。(同書21・22P)

この号には「のせられなかった人のつづり方」と題して「綴方は頁数のツゴウで今度は全學級の作品をノセテアゲル事が出来ないでザンネンでしたが、それにしても次の人の綴方はこゝにノセラレタ綴方に負けな

い程リッパなものでした。」という文とともにのせられなかった作品名と作者名を一頁で記してある。このことは「編輯後記」で「紙や印刷費が騰貴したこと、非常時の我が國策の立場からやと百頁みなさんのすぐれた作品の全部がのせられなかったのは残念でした。」とあるように戦時下の物資が窮乏してきたことによる。さらにこの号には尋四 米谷節子による童話「もん白てふと男の子」が掲載されている。

13、卒業記念号 一四三 昭和十四年三月 一〇四頁

「卒業記念特輯」の中で卒業生の綴方六点と詩十六点が、また在學生作品として詩が六十六点掲載されている。

この号には一高女専攻科生による「教生感想」が「教生日記抄」として三Pにわたり掲載されている。

14、一四四 昭和十四年七月 八〇頁

この号はツヅリカタと詩をそれぞれ特選集と一般作品に分けている。特選集のうちツヅリカタは各学年(高等科一年含む)七点、詩は七点掲載されている。一般作品のうちツヅリカタは三十五点、詩は六十四点掲載されている。詩・ツヅリカタともに時局を反映した「兵隊さんごっこ」「ひかうき」等の題材が多い。なお詩には「ウタ」というフリガナがうっている。この号では各作品に評はついていなくてツヅリカタ・詩ともに副田氏がそれぞれ一頁つつ総評をしている。見開きの頁に與田準一の詩が掲げられている。

15、一四五 昭和十四年十二月 六九頁

この号の表紙は少年が銃を持って起立していて、その上には三機の飛行機が飛んでいるというものである。見開きの頁は「與亞奉公日の歌」

が掲げてある。ツヅリカタは八点、いずれも時局を反映した題材である。すなわち尋一から高一まで順に題名をあげると、「オトウサンノオカヘリ」「けがをした兵たいさんのおむかへ」「兵隊さんの見送り」「お父様へ」「實習地作業」「親類の兄さんへ」「無言の凱旋」「陸軍墓地の清掃」となる。

また鑑賞作品として、鹿児島朝日新聞社主催行幸記念教育品展覧會に於て特選になつた綴方九点があつてある。

特別作品として全國中継放送「夏休の日記から」と名譽旗受賞作品「仕事を喜んでしてゐる人」があつてある。いずれも銃後の国民の望ましいあり方を哲蒙する文章である。詩は全学年トクセン集として十四点、一ぱん作品として六十三点掲載してある。副田氏が「皆さんの詩を讀んで」と題して書いている中に、今度のは學校一せいに作つた即席會の詩をのせることにしたので、詩の出來ばえがよくない旨、また事變が始まつて三年もたち、事變の始まり頃ではウタへない詩が出てきていることが指摘されている。

巻末の「編輯室から」に綴り方を各学年一点にしたのも、活字が小さいのも「非常時國策にそふため」であるとの記述がある。

16、卒業記念號 一四九 昭和十五年三月 四十五頁

この号は「卒業の朝」という見出しの下、卒業生九名のツヅリカタ九点と、詩集(尋一、高二)という見出しの下二十一点の詩が掲載されている。頁数も少なくなり、一三四号に見られる全卒業生のことは掲載されていない。頁数が少ないことを「編輯室より」で「これも紙價、印刷諸雜費騰貴の爲、致し方のないことで國策に沿ふためだと思つてガマンして下さい。」と説明している。

17、紀元二千六百年記念號 一四一 昭和十六年三月 一二八頁

この号は紀元二千六百年関係の記事が大部分である。兒童作品も二千六百年を題材にしたものが大半である。

これまでの号だと編輯後記、編輯室よりとなつていたところが「おたより」とあり、そこにこの号の特質について記述してある。

此の學園はイクラカまだ皆さんにはワカリにくい所もあるけれ共、アナタ方のお父さんやお母さん方はキット喜んで下さるでせう。アナタ方も亦大きくなつたら「これはホントによい本だと」大事に大事にしてアナタ方のお子さんやお孫さん達に『これはスクナクトモ二千七百年までは大事にしてシマツテおきなさい』といふこととせう。(同書128P)

また、この号の刊行には印刷所の馬場勇吉氏の援助があつたことも記されている。そして、この号以降定期的に出せなくなる旨の断わりがある。

今年からしばらく「我等の學園」も年三回出されなくなつてザンネンですが、コレもお國への御奉公です。シバラクがまんませうね。(同書128P)

戦雲急を上げつつある中で、この号以降発行されたか定かではない。昭和十六年政府による「教育雜誌統合廢刊指令」「言論・出版・集会・結社等臨時取締令」公布により、あるいはこの号が最終刊であるかもしれない。希望的観測であつても時代的背景を考えるならばこの後二・三号で終刊と考える方が妥当であろう。

六

昭和初期、文集は全国各地で盛んに発行されている。それらの文集を一堂に集め優秀なものを紹介している「綴方教育」の全國小學校兒童文

集展覽會の昭和五年九月號に次のような記述がある。

○この室では内容の整備の點では「我等の學園」を擧げねばなるまいね。

△この室のみでなく全國で一二といふところだろう。（同号 110 P）

つまり、この誌上展覽會において全國一二という評価を得ているのである。それも単に体裁とか作品とかのレベルではないのである。筆者が握した限りにおいて、「我等の學園」は最も教育的営みの所産であり、それがために他を凌駕しているものと考えられる。

発表された綴方作品は校内の即文会、または特能と称する個人指導によっている。しかしながら学校全体での綴方・詩に対する指導がどのようなものであつたろうか。次の評は学校全体の指導をよく示しているものである。

（補習科の生徒の詩の後に）

補習科の人たちの詩は補習科といふ學年から見た時にはまだまだと思ひます。が大津君と池畑さん以外の人たちは初めて此の學校に來て初めて「詩」を書いた人たちであつてみれば仕方のないことで最初の詩としてはむしろ「正しい兒童詩が判つて來ましたね。」といつてほめて上げる可きでせう。（132号136 P）さらにはその教育性を示すものとして、掲載されなかつた者への思いやりがあるのである。

「僕等の希望」や「思ひ出一つ」は小學校六年乃至八ヶ年間、唯一度も其の作品を「學園」に發表せずして卒業する兒童達に對してせめて一行でも、といふところから生まれ出たもので、これが此の「學園」をどれ程ナツカシイモノにするかわからないのである。『我等の學園』卒業記念號の編輯を語る『副田凱馬・「綴方教育」昭和十四年一月号14 P』したがって市尋校の卒業生にとつてみれば限りなくつかしいものとなっている。卒業生有馬マリ子氏（本学部教授）にとつては、『我等の學園』

という名前を聞いただけでなつかしい同級生に会えた気がした。』という存在だし、川辺盛幹氏（元長田中校長）も、何十年も経た現在『「學園」の印刷のインクのおいまでありありと思ひ出すことができる』ほどに卒業生の胸中にいつまでも残っている詩文集となっている。

最後になつたが快く資料を提供していただいた副田凱馬先生・貴重なお話をいただいた市尋校ご卒業の龜之園重隆先生・川辺盛幹先生・有馬マリ子先生・それに兼子校長の資料をお送りいただいた別府鶴見丘高の校長佐藤実先生に厚く感謝する次第である。

注1 同号の十三・四・五Pに懸賞算術問題及解答があり、六十八・九Pに俳句が掲載されている。

注2 はめ絵 ある一定の枠をつくり、その枠内に人物・風景等をうまくはめこむようにして、一番ピッタリあってもしろいものを良しとするもの。

注3 同号末尾の「編輯を終りて」のところに「◇本號は特に學校から父兄へと題して父兄母姉の一覽を願ひたい所存から物した、乞う愛で子のために一讀再讀してほしい。」とある。

注4 校名・所在地・校長・特殊の教育活動の項があり、教育活動の項には、「神聖なる天皇の詔勅。創造性。自學。社會化。郷土化。生活化。」とある。

注5 他に、「他府縣よりの參觀者は毎年二千を突破するの盛況を示してゐます。『日本一の形は日本一の質にまで』の發展を遂げました。勝目泰成」(六十四頁)「校長先生は常に『日本一の形を日本一の質にまで』とおっしゃっておられます。私等職員一同はそれを目標としまして獻身的に努力を惜ず務めて來ました。吉田義則」(六十七頁)等がある。

注6 兼子校長の學校経営は「學習指導」と「郷土に立つ國民教育」を柱にしていたと考えられる。(二二八號五頁)この頃時代の要請でもあった郷土教育は郷土を愛するから國家への愛へむかうものであった。当然「調べる(た)綴方」の実践が多くなされたのである。

注7 兼子校長のおたよりは子どもたちにも理解できるように平易でわかりやすいものである。ここにも兼子校長の教育者としての資質をみることができ。

注8 この頃の教え子の一人有馬マリ子氏によると、副田氏は公平な先生というイメージが現在までも強く残っているということである。なお有馬氏によると副田氏の口グセは、上手な作文を書くために作文を書くのではない。作文のけいこをするのはすばらしい人間をつくるためなのだ、ということであったという。氏の強固な作文教育観がうかがえる。

また、次のような記述も見られる。これらのことを忌み嫌っていたことがうかがえる。「英雄主義的な綴方人がエラサウナコトをしかめづらしてしゃべってばかりること」「(兩文集の正しき姿)副田凱馬「綴方教程」四七四P所収)

注9 市尋校の卒業生(昭和十二年卒)である龜之園重隆氏(元甲南高校校長)によると子ども心にも兼子校長の存在を誇りに思っていたという。また兼子校長は別府中に赴任後も「名校長として別府中学校發展に大変な貢獻」をし、別府鶴見丘高の學校史(昭和五十四年)の中で5Pを費やしてその人徳を讃えられている。

注10 「綴方教育」「鹿兒島教育」に紹介された昭和五年(昭和十四年の県内の詩文集は二十七点にのぼる。また「綴方教育」誌上の全國小學校兒童文集展覽會には一万五千点ぐらいの文集が寄せられたという。